

炬ばたセイ談会とのつながり



中山とし子

「炬ばたセイ談会」とのつながりを書く前に、主宰者である入来院重朝氏御夫妻との御縁ときっかけを、まず書かせていただこうと思う。これまで、他県に住んでいる私がなぜここにいるのか、会員の方々にきちんと説明する機会がなく、冊子とのつながりだけで日が過ぎてしまった。私は、二〇〇一年の二月、入来院家を唐突に訪問したことがあります。その理由を説明するために、自分の係累のことを書くことをお許しいただきたい。

二〇一五年に九十三才で逝った父は、私が五十一才(二〇〇一年)の頃まだ元気だった。

父方の曾祖父は、下手の今村どんから中島家に養子に入った人だったそうで、次の代の祖父に当たる人は、同じ今村どんから養子に入った今村家の末っ子であったと聞いている。ややこしいのだが、実兄の養子先である中島家に、末っ子の祖父が養子に入り代を継いだことになる。二人とも大酒飲みであったため、今村家から追い出されたと父が冗談のように話していた。祖父と曾祖父は兄弟の間柄であったが、長男と末っ子だったため、年齢は親子ほど離れていたものと思われる。親戚であった証拠に、小学生の頃までは、お正月、お盆の度に祖父の実家である今村家を訪問して御馳走を頂いていた。その家に、巻物形式の家系図があるというのが父の自慢で、巻物が八畳間に入らないので、端から端に敷き返し広げて、何度か見せてもらった、と周囲に話した。長年月経っていたせいで、臭かったそ

うである。本当だろうか、と従弟たちに聞いてみたところ、彼らも同じ話を父親から聞いたそうである。

父は、若い頃はこんな話などはしなかった。だから、自分の出自にあまり興味はなかったのだが、人生の終末期が近づいた時、父が実家の仏壇の整理や家系図の整理をするようになり、今村の家系図のことを思い出したらしかった。その家系図が、曾祖父と祖父の出身である今村家の主人（父からは従兄にあたる）が亡くなってから見えなくなった、というのが父の悩みだったので、本当かどうか確かめてみたくなった。と言うのも、そのころ、私は『入来文書』『近世入来文書』を佛教大学と奈良女子大学で手にして、興味深く内容のあれこれを読み、我が故郷の立派さに大変感動していたので、気持ちはいくいく前に進んだ。自尊心を満足させようとか、そんなつまらな

い気持ちはなく、ただ、本当のところを知りたい、と強く思った。元々、真実追求型という面倒な性格だ。

「庶流今村家文書」と家系図は、朝河貫一原編の『入来文書』にはないが、阿部善雄、古川常深、本田親虎編の『近世入来文書』には、かなりのページをさいて詳しく載せられている。この今村家とは、入来麓の今村家のことである。下手の今村家とは、遠い昔は関係があつたのかもしれないが、今は親戚付き合いもない、との話だった。後に麓の今村家と親しい方とお電話で話して自分なりの直感を得たが、今は述べない。因みに、今村家系図の最後は十六代純義になっているが、下手の今村どの父の従弟の名は、純忠であった。しかし、もうどうでも良いではないか、という気持ちがある。歴史とは、こういうことなのだろう。今村も実家の中島も早々と更地に

還ってしまったことだし。

と、今はこのように思えるが、当時は、もう少し家系図の行方を確かめたいという気持ちがあった。『近世入来文書』の編纂をされた方々はすべて亡くなっておられ、どなたに聞けばわかるだろうか。ある人が、入来院さんはどうだろう、と言ってくれたので、失礼も顧みず勇猛果敢に入来院家を訪れた、という次第。何か目新しい情報でもあるのではないかとまるで新聞記者のような心持ちになっていた。

茅門を入ると大きな玄関があり、

「さあさあ、上がりなさい」

と奥様の貞子氏がおっしゃって下さり、まず自己紹介から始め、早速下手の今村家のことをお尋ねしたが、ご夫妻共に、全く本当に何もご存じなかったばかりか、却って面食らった様子でいらつしやった。壮年時代には入来



入来院御夫妻と著者。平成13年（2001年2月）茅葺門邸にて

にいらつしやらなかつたわけなので、それも無理はないと思い、それ以上の追及はやめ、諦めた。勢い込んでいたのがっかりしてしまつたが、それよりも貞子氏の小説の話とか、能の話とか、短歌の会の話とかで盛り上がり、結構長居してしまつた。重朝氏が奥様のことを真から誇らしく思つていらつしやることも、お話の中で何回も出てきた。この入来院家訪問は、自分の人生の中で自ら積極的に動いた数少ない経験だつたが、残念ながら目指した進展はなかつた。

拝受して帰つた『鹿児島の女性作家たち』

『貞子の語る入来文書』などの御本を拝読すると、貞子氏は、真つ直ぐな、なかなかの人物であることがわかつた。まず心を打たれたのが、突然訪ねて来た初対面の若輩者に対して、貞子氏が垣根を作らず、偏見を持たず忌憚なく語つて下さつたことだつた。この感覚

は、外国人や一部の禅僧の方々には普通に経験しているが、女性では珍しいし、後に、エッセイ集『茅門のある町から』を読んで、納得したのだった。貞子氏の文章は、本当に率直で正直である。隠し事なし。私はここが、誰であろうと、たまらなく好きなんです。

貞子氏からは、奈良に帰つてからも入来花水木会へのお誘いが何回かあつたが、まず住居が離れていること、俳句をやつていたこと、当初の目的は達せられなかつたことで、簡単に入来院家からは遠ざかつたことになる。

ところが、やはり御縁はあつたものと見えて、次に入来院氏とつながつたのが、下土橋渡氏の「ワシモのホームページ」だつた。

唐突な訪問から十年後の二〇一二年に入来大宮神社の「神舞」を調べている過程で、目を見張るような素晴らしいホームページに行き当たつた。入来神舞の沢山の写真が臨場

感溢れる美しきで惜しげもなくホームページ上に広げられていた。写真の美しさは秀逸だが、県内外の様々なところを訪れてその報告が写真と文章でつづられていたり、地域の歴史的行事と人物描写を詳しく取り上げておられたり、まるで自分がその場にいるような臨場感。読んで見て飽きなかった。入来の新名の写真も沢山アップされており、長く故郷には帰れなかったから、あの入来院貞子氏が入来でこれほどの大活躍をされていたとは、改めて感動した。

その後ワシモさんに連絡させていたただくには勇気がいったが、どのようないきさつだったか、『炉ばたセイ談』七号、八号、平成二十三年秋号と二十四年秋号を送って下さった。これが、『炉ばたセイ談』との初めての御縁なのに、七号は、貞子氏の追悼文集になっていた。貞子氏は、二〇一一年（平成二十三年）

五月に、突然のアクシデントでご逝去されていた。言葉がなかった。

七号の中に、渋谷繁樹氏の「オヒイサマの電子郵便」という文がある。今開けると、当時鉛筆で線を引いたりして、感じ入った痕が見える。渋谷氏の文ではなく、渋谷氏が表現された貞子氏その人に。

〈率直果敢、修飾無縁、．．．．鋭利な舌鋒は切りまくった〉と、勇ましい。また〈躊躇も遠慮も心配りもない〉と親しいからこそ、型破りな先輩への憧憬にも似た表現もあり、それは貞子氏の人間性を論じているのではなく、頭脳の働きが良すぎて周囲がついて行かないほどの対象への深い洞察と分析力がそうさせるのだろうな、と思わせる。このような人はしばしば誤解されるが、対象を正確に真っ直ぐ見ることは、何よりも物を作り文を書く人間に必要なことである。

ワシモさんから頂戴した『炬ばたセイ談』誌の特徴を面白いと思った。各自、書きたいことを書けばよい、と重朝氏の文にあり、八号の重朝氏の「もどき雑考」は共感と共にくすくす笑いながら読んだ。ほかに、中西喜彦先生の「牛の一生から男女の役割を考える」は、珍しい知識が沢山あり、理系の方の論証の仕方が面白く、赤線を引きながら夢中で読んだし、下土橋氏（ワシモさん）の「庄内憧憬」には、藤沢周平のフアンの一人としても深く共感した。右も左もない、それぞれが自分の考えを率直に書く、ここに愉快なものを感じ、仲間になりたいと思った。会員の方々は、どなたもその道の一流の方々ばかりなので、いつの間にか自分も勘違いして、学生時代から興味のあった謡曲にはまったりして、中西先生に助けていたくださながら「鶴亀」を謡ったのは宝のような思い出です。



中西喜彦先生と「鶴亀」を謡う著者。令和元年（2019年）10月炬ばたセイ談会にて

二〇二〇年七月。私は、愛知専門尼僧堂の堂長、青山俊董老師あおやましゆんどうから在家得度を受けました。道名と戒名を頂戴し、絡子らっす（御袈裟を縮小して胸から塔けるようにした仏具）を縫ったり縫い方を教えたりして、仏弟子として生きる努力をしている毎日です。ここに至るまでには、セイ談会の御縁だけで、南泉院の宮下亮善和尚様を、これも唐突にお訪ねしてご

迷惑をかけたこともありました。人生のどん
づまりにおり、「頭も剃ります」と放言したと
思う。ミヤンマーの小学校建設の場にご一緒
したいと申し出ていながら、色々な事情でそ
れも果たせぬ間に十年が経ってしまった。思
えば、炬ばたセイ談会には何の貢献もしてい
ないのに、大いなるものをたくさん頂いてい
る。貞子氏がワシモさんをこの会に引っ張っ
て下さったおかげで、炬ばたセイ談会との御
縁につながったことを改めて有難く思います。
入来院貞子氏とは、マルチな才能を持ちな
がら、人への態度は上も下もなく、右も左も
なく、突き抜けた大いなる人間性を存分に発
揮されて悠々とこの世を楽しんで行かれた方
であったのでしよう。合掌

(エッセイスト)



らくす
絡子

(御袈裟を縮小して胸から塔けるようにした仏具)